

「新潟の教育を語る集い」に参加して

小 東 由 男

8月26日、新潟市内で勤務している若い教員から、勤務実態や「仕事のやりがい」について聴く機会を得ました。「学校はブラック!?」若手教師と考える教職の困難と希望」をテーマとした集いです。その集いで話題になった内容について紹介します。

まずは、パネラー3名の発言です。

小学校に務めるAさんは、新採用です。同じ学年の先輩からアドバイスをたくさんもらって、助かっているとのことでした。また、同じ時期に採用された若手教員との交流があり、気分転換になっているとのことでした。

中学校に努めているBさんは、採用2年目です。授

業の準備を熱心に進めて、しばしば時間外勤務をしています。納得できる授業をしたいと意欲的です。学習への参加態度がまちまちな生徒の学習意欲を引き出すため、様々な工夫をしています。でも、思うようにいきません。そんな時、教科の指導で知り合った先輩教員から「授業の準備を手伝ってもらったら」とのアドバイスをいただきました。そこで、準備等に、生徒の参加を募ったそうです。学習の準備に自ら参加したことで、授業に集中する態度が形成されてきたとのことでした。

また、教材研究で帰る時間が遅くなっていると、管理職から「早く帰るように」と指導されてしまうとのことでした。勤務時間の在り方についても考えたとのこ

とです。

特別支援学校に務めているCさんは、発達障がいの子生徒に向き合い、発達の様子に一喜一憂している様子を語りました。複数の職員で成長を見守ります。時には指導方針について食い違ふことがあります。話し合いをする中で、協働して進めることの大切さについて学んできたとのことでした。

同学年の先輩や同期の若手教員、同じ教科担当の先輩からのアドバイスを受けて、指導の力量を高めようとする真摯な姿に感心しました。また、土日は学校の仕事はしないでリフレッシュしているという方の話もあり、心身の健康についても配慮している様子がうかがえました。

参加者からは「若いときは自分のことばかり言ってきたが、自分だけが正しいとは限らない。同僚のよいところもみて学ぶ姿勢も必要だと感じている。今日の若い先生方の話はとてもよかった」という意見がありました。

参加した大学の教員は「教員になった卒業生が一番

話題にすることは子どものコミュニケーション能力がないというが、自分たちにコミュニケーション能力はあるだろうか。そもそも人間と人間とのかかわりは相手によつて左右されるのではないのでしょうか」との意見が出されました。

参加した高校の教員は「小中学校で個別支援計画をつくってきた子どもは手をかけられて育つてきているので、高校に入学して成長している。小中学校の教員に感謝したい。個別支援計画がなくグレーの子どもは、高校ではなかなか大変です」という意見を発言されました。

若い教員からは「私は、1校目の学校で頑張りすぎて病気にかかってしまいました。休みなさいと言われて、休んでいいんだとわかりました」との発言がありました。

参加者には小中高校、特別支援学校、大学の教員やOB、特別教育支援員、市民、市会議員がいました。若い教員や、教育を大切にしたいとの各層の参加者の声を聴くことが出来て、大変有意義な集いでした。

(こひがしよしお・所員)